

SNS を活用した遠隔授業

—異文化理解授業を例として—

簡 珮鈴, 神戸学院大学

Utilizing social networks in teaching cross-cultural communication class online:a case study

Pei-Ling Chien, Kobe Gakuin University

日本における高等教育機関は、新型コロナウイルス感染拡大の影響に伴う休校措置を受け、2020年初頭より、e-Learningによる遠隔授業（オンライン授業）を実施することになった。これまで、そのほとんどを対面で行う授業しか経験を有さない教師にとって、こうした遠隔授業（オンライン授業）の実施は、かなり大きなチャレンジであると言えよう。本稿は、こうした点を踏まえ、大学生を対象とするSNSを活用した遠隔授業といった、今後において展開されよう、このような新しい授業形態の一助となるべく、SNSを活用した異文化理解授業について述べるもので、ここで取り上げる授業は、事後の授業満足度アンケートによれば、受講者がSNSを活用したこうした授業に満足していることが示されている。

キーワード: SNS, 遠隔授業, オンライン授業, 異文化理解

1. はじめに

ICTの急速な進化と普及に伴い、人々のコミュニケーションは、対面から、バーチャルな非対面なコミュニケーションに移行しつつある。また、無線LANとスマートフォンやタブレット等といったモバイル端末の普及により、自宅、あるいは職場にしながら、世界中の人々と意見交換をしたり、話題の共有をしたりすることができるようになってきている。特に、SNSというソーシャル・ネットワーキング・サービス（social networking service）の誕生とその普及は、従来の「メッセージの送信相手を明示的に指定する電子メール型のサービスと、特定の話題に興味を持つユーザーが集まり、交流するフォーラム形式のサービス」（大向，2015，p.70）から、不特定多数の人間をネットワークにつなぎ合うといったコミュニケーション手段に変容している。こうした中、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、日本における高等教育機関は、感染症対策に伴う休校措置の一環として、2020年初頭より、e-Learningによる遠隔授業（オンライン授業）を実施することになった。具体的には、ビデオ・Web会議サ

ービスのZoom、Microsoft Teams、Google Meet等のアプリを利用し、受講者に遠隔授業を提供するといったものである。本稿は、新たな授業形態への展開の一助となるべく、上述した各種のアプリを利用して実施された遠隔授業の補完として実施した、SNSを活用した遠隔授業の試みについて述べるものである。

2. SNSについて

中釜（2020）によれば、日本国内で多く利用されているSNSの上位は、以下に示す表1のように、8,400

表 1 日本国内のSNS利用状況について

媒体	ユーザー数	ユーザー層
LINE	8,400万人	幅広い年齢層
Twitter	4,500万人	10～30代
Instagram	3,300万人	10～20代
Facebook	2,600万人	20～40代
TikTok	950万人	10～20代

（引用元：中釜啓太，2020）

万人のユーザーを持つLINEが1位で、以下、2位Twitter、3位Instagramがそれに続くとしている。また、表1から見れば、LINEが幅広いユーザー層であるのに対し、Instagramのそれは10～20代に集中している。また、その利用目的から見れば、スタンプでコメントをすることができるチャットや無料通話のアプリであるLINEが、主にメッセージのやり取りに使われているSNSであるのに対し、Instagramは、撮影した写真や、そうした写真を加工して投稿するSNSである。そして、LINEやInstagramのいずれも、いわゆるLive配信が可能である。ただ、LINEが、トークルームでのLive配信になるため、Live配信画面を全画面表示できず、撮影したものが見にくいといったデメリットがあるのに対し、Instagramは、Live配信画面を全画面表示することができる上、視聴者からのコメントがLive配信画面に表示されるため、視聴者同士がリアルタイムで相互コミュニケーションすることができ、親近感や臨場感がもたらされやすいといったメリットがある。こうした点を踏まえ、本稿で取り上げる遠隔授業においては、利用するSNSとしてInstagramを選択した。

3. SNS Live 配信による異文化理解授業

Instagram Live 配信による異文化理解授業は、2020年5月26日(火)15:30～17:00および同年6月2日(火)13:45～17:00(15分の休憩時間を含む)の、延べ4.5時間の授業を2週にわたり行った。対象は中国語を専攻している3年次生26人で、台湾・台南に所在する長栄大学より、中国語での異文化理解授業を提供してもらう。授業の概要は、台湾文化についての紹介である。具体的には、台湾の社会を構成する一要素である民間信仰としての閩南式お廟の紹介と、日本人が見た台湾をテーマとするトークセッションで、以下に示す表2のようなものである。

表2 異文化理解授業の詳細について

日付	日本時間	テーマ
5/26	15:30～ 17:00	閩南式のお廟の紹介&お廟の管理者とのトーク

6/2	13:45～ 15:15 (15分の休憩時間を含む)	日本人が見た台湾 ①古本屋を改装したホテル「艸祭(ツアオジイ)」の紹介&日本人3人によるトーク ②台南孔子廟の紹介&日本人3人によるトーク ③台南の人気フルーツ店「莉莉水果店(Lily Fruit)」の紹介&日本人3人によるトーク
-----	----------------------------------	--

続いて、各コンテンツについて、述べる。まず、閩南式のお廟についての紹介では、以下に示す図1、図2、図3左のように、歴史、建築様式、参拝の作法とマナーなどを中心とした説明や、図3右のように、担当教師とお廟の管理者2人とのトークセッションを実施し、受講者からの質問などに答えるなどとした。



図1 閩南式のお廟についての紹介—その1

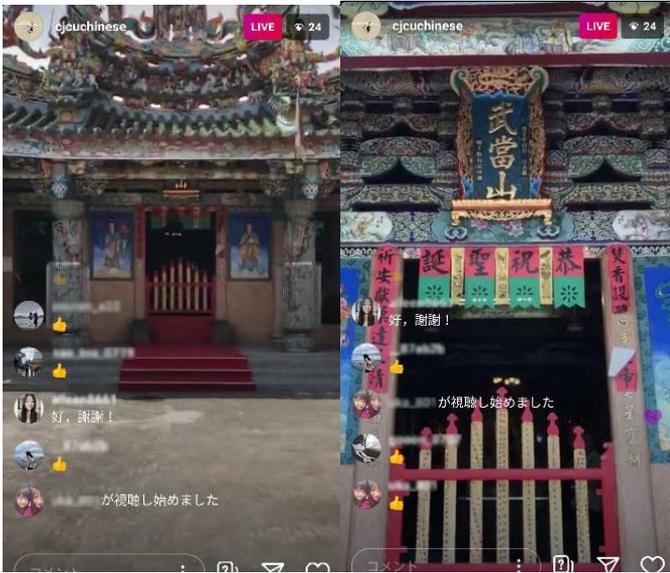


図 2 閩南式のお廟についての紹介—その 2



図 4 日本人が見た台湾—その 1

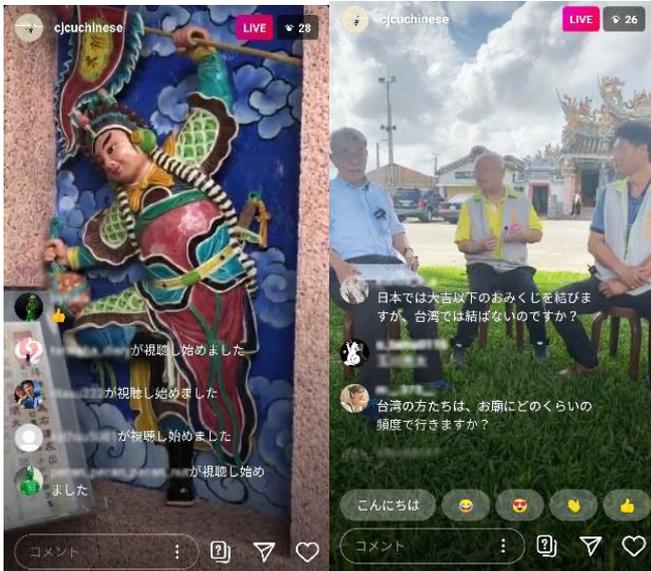


図 3 閩南式のお廟についての紹介—その 3

保坂 (2016) は、13 年間にわたり日中異文化理解教育に携わった経験から、異文化理解のための授業で、「日本と異なると感じる中国の文化」「中国と異なると感じる日本の文化」(p.105) といった事例を挙げることにより、「異なる国の文化の紹介、つまり中国文化の紹介にとどまることなく学生が日本と中国の両国文化に向き合い、両者に通じるものと差異とに気づき、両国文化への関心と理解を深め、友好的関係を構築するよう導くことを常に心がけてきた」(p.104) とする異文化理解教育の方向性を示した。実際に、日台異文化理解教育においても、台湾人教師による異文化理解授業だけでは十分とは言えず、日本人からの視点も必要となる。

そのために、本稿における遠隔授業では、日本人が見た台湾をテーマとして取り上げるべく、観光スポットのホステル「艸祭(ツァオジィ)」(図 4 左)、台南孔子廟(同図 4 右、図 5 左)、台南の人気フルーツ店「莉莉水果店(Lily Fruit)」(同図 5 右、図 6) を紹介しながら、現地在住の日本人や日本留学生が見る台湾はどのような国か、個人の実体験に基づき、日本と台湾の相違点について述べている。

また、この異文化理解授業では、中国語学習との相乗効果を図り、リスニングによる大量にインプットを与えるべく、主に中国語で実施するが、受講者が理解

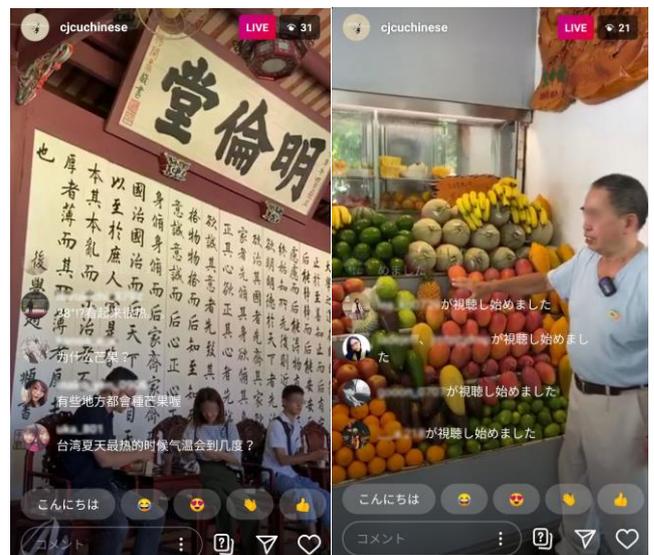


図 5 日本人が見た台湾—その 2



図 6 日本人が見た台湾—その 3

しやすいように、話すスピードを配慮しつつ、双方向性ある授業が実現するように工夫をした。例えば、以下の図 7、図 8 のように、受講者は、Live 配信中に教師に対してメッセージを送信することで、いつでも質問したり、コメントしたりすることができるといった環境を整えた。

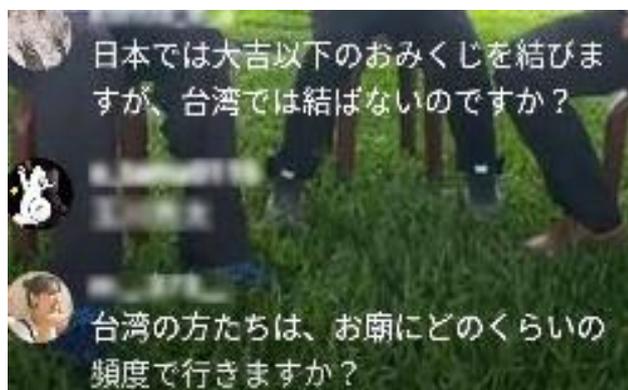


図 7 受講者からの質問・コメント—その 1



図 8 受講者からの質問・コメント—その 2

4. SNS Live 配信による異文化理解授業に対する受講者の反響

当該授業に対する受講者の反響を把握すべく、授業実施後、Google フォームを利用しアンケート（5 点満点の 5 段階評価）を行い、受講者に無記名での回答を依頼した。その結果、閩南式のお廟の紹介およびお廟の管理者とのトークについての Instagram Live 配信遠隔授業に対する満足度は平均 4.12 点（N=22）、日本人が見た台湾については平均 4.68 点（N=23）を得た。また、具体的な意見や感想として「実際にお寺を見ることが出来てとても楽しかったです!インスタライブを使ってするのは新鮮でした!」「本当は現地に行って見たかったですけど、それと同じぐらい雰囲気を楽しめてよかったです!ありがとうございました!!」「日本人が感じたこととかを聞いてよかったです!また台湾に行きたくなりました!」「台湾にとっても行きたかった!お話されていた内容がとても明確で面白かったです。実際にみなさんが生活されている中での説明だったので台湾のことを深く知ることができたのではないかと思います」といった肯定的なものがある一方で、「Instagram のライブの授業は画期的で授業内容も良かったけど、音声途切れ途切れで聞き取りにくいところがありました」「インスタライブはライブなので台湾にいるかのように授業を受けられますが、少し電波が悪くて見づらかったです」「途中から見れなくなって再開するのにものすごく時間がかかった」といったものもあった。こうしたコメントから見れば、このような Live 配信授業では、コンテンツのみならず、安定した通信環境が必要である、電波が届きにくい環境での Live 配信を避けると同時に、授業をする側の教師だけではなく、授業を受ける側の受講者も、安定したネット環境の確保が重要であることが分かる。

5. まとめと今後の課題

遠隔授業は、物理的距離の障壁が取り除かれるため、異文化理解教育においては、さまざまな可能性を秘めていると言えよう。そして、その一端として、ビデオ・Web 会議サービスの Zoom, Microsoft Teams, Google Meet などのアプリを利用して提供された遠隔授業の補完として、SNS を活用した Live 配信授業の試みに

ついて述べたのが本稿である。現地に赴くことができない受講者は、こうした Live 配信授業を受けることにより、現地の風土、文化、習慣等を疑似体験することができ、異文化についての理解を深めることができよう。さらに、こうした SNS による Live 配信は、授業としての運用の他、受講者がゲストとして参加できる日台交流座談会のような催しを実施するなど、受講者は、Live 配信を視聴するといった受け身的な姿勢だけではなく、Live 配信に積極的に携わるといった、いわば「参加型」の異文化理解教育を受けることも可能であり、こうした点を今後の課題としたい。

謝辞

本稿「異文化理解授業」の実施にご協力いただいた、長栄大学華語文教育センターの皆さまに、この場を借りて感謝の意を表す。

参 考 文 献

- (1) 大向一輝: “SNS の歴史”,通信ソサイエティマガジン, 第 34 号(秋号), pp.70-75 (2015)
- (2) 中釜啓太: “【2020 年 6 月更新】主要ソーシャルメディアのユーザー数まとめ”
<https://www.uniad.co.jp/260204> (2020) (2020 年 6 月 29 日確認)
- (3) 保坂律子: “日中異文化理解教育の試み”, 駒沢女子大学研究紀要, 第 23 号, pp.97-106 (2016)